

小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く

A Walking “For the Good of Sculpture in Japan” in *Matters of Sculpture*

by ODAWARA Nodoka

永田 郁

Kaoru NAGATA

崇城大学芸術学部美術学科教授

Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：彫刻、長崎、戦争、《平和祈念像》、『彫刻の問題』

Keyword: sculpture, Nagasaki, war, *Peace Statue*, *Matters of Sculpture*

Abstract

After reading *Matters of Sculpture* that took up the hypocenter of Nagasaki, my desire to go to Nagasaki has become stronger day by day. And on September 3rd 2018, I was able to go to there.

This short essay is a document with photosnaps when walking monuments/sites appearing in Nodoka ODAWARA's paper of “for the Good of Sculpture in Japan” in *Matters of Sculpture*. By walking on the monuments/site, I want to think about the meaning of her paper.



『彫刻の問題』(2017年、トポフィル)
(https://blog.goo.ne.jp/saizo_hk/e/295e17362053c96c2f1ee93ee0e79454より転載)

『彫刻の問題』について

ここで取り上げる『彫刻の問題』(白川昌生・金井直・小田原のどか著、2017年、トポフィル)は、これに先立って長崎市の原爆落下中心地に建てられたモニュメントに焦点を当て、その意味を問い直す展覧会「彫刻の問題」展が2016年9月28日～10月10日、愛知県立芸術大学サテライトギャラリーにて開催された。本書は同展の企画者、金井直と、出品作家の白川昌生、小田原のどかによる公共彫刻の問題点に焦点を当てた論考を収録した論集である。

この本の『彫刻の問題』というシンプルなタイトルを街の本屋で見かけ、そして、帯には「爆心地・長崎から彫刻を問う」と朱書きで書かれており、なんだろうと思ひ、爆心地・長崎と彫刻がどう問題になっているのだろうかと思ひ、迷わず手に入れた。読むのにはそんなに時間は必要なかったが、いつからか「銅像」が

気になりだし、そんな折に出会った本であったので、何度も読み返し、近代以降の彫刻、現代の彫刻の状況が爆心地・長崎に設置されたモニュメントを通して三氏の独自の視点より語られていき、本書を通して、「彫刻の問題」とは何かを知ることとなった。

この本を読んでから、ずっと爆心地・長崎に行きたいという思いがあり、漸く2018年9月3日に爆心地・長崎を訪れる機会を得たので、本小文は小田原のどか氏による論考「この国の彫刻のために」(『彫刻の問題』pp.36-71所収)に登場する長崎の平和公園のモニュメントを紹介し、小田原のどか氏の「この国の彫刻」を歩いてみたい。

小田原のどか「この国の彫刻のために」を歩いてみる。

さて、本論考冒頭は次の文章から始まる。

戦後日本の彫刻を考えるうえで、長崎は最も重要な場所である。

(同書、36頁)

そして、第1章は長崎の平和公園がいかなるものかを紹介し、そして、第1章を次の文章で閉じる。

長崎の平和公園はひとつの展覧会場のように見える。この展覧会は問う。戦後日本における平和とは何か、そして人間にとって彫刻とは何か、と。

(同書、38頁)

では、テキストの文脈にそって登場してくるモニュメント、彫刻の幾つかをここで紹介しよう。(位置関係は図1のGUIDE MAPを参照の事。)その他、爆心地・長崎における被爆した遺産も参考として取り上げる。

平和公園は、長崎の路面電車の「平和公園」駅を降りて、浦上街道(国道206)を渡り、北に行くと同程なくして到着する。また後で登場するが、平和公園の南には道を挟んで「爆心地公園」がある。

北村西望作《平和祈念像》(図2)

長崎の平和公園は手前に平和の泉(図3)があり、その軸線上の奥に、《平和祈念像》が鎮座する。平和の泉を抜けると、長崎刑務所浦上支所跡があり、その平和の泉との間に、平和の彫刻群が点在する。

この祈念像は1955(昭和30)年8月に長崎出身でのちの日展名誉会員、文化勲章受章者でもある彫刻家北村西望によりつくられた。高さ、9.8メートル、台座3.8メートル、重量約30トンの巨大なブロンズ像(銅像)である。これと同時に平和公園は整備されていった(同書25頁参照)。

この像は腰に布を巻くだけの裸体像で、右足を曲げ、台座にのせ、左足を台座に踏み下げる姿勢で坐している。右手は天上に垂直に挙げ、原爆を表し、左手は水平に横に広げ、これは平和を表すとされている。平和の泉越しに垂直に伸びる線上にこの像が鎮座し、人々を迎えている。行った際にも多くの外国人観光客がその像を見上げ、像を背景に記念写真を撮る光景を目にし

た。

3.8メートルの岩を積み上げたような台座は水面にどんと威風堂々と存在し、この祈念像をしっかりと受け止めている。

像の背後に回ってみると、像が坐す台座の裏側には「全世界平和運動の先駆」「今や人類最高の希望の象徴」という語を含む平和祈念像作者の言葉が刻まれる。イメージと台座のテキストががっちりタッグを組み、平和の視覚化が達成されているのだろうか。観光客が像を見上げ、楽しげに記念写真を撮っているのだから、これはまさに平和な光景なのだろう。

《平和祈念像》を囲む平和の彫刻群(図4~8)

その西望の《平和祈念像》を称揚するようにその周囲には、「平和」、「未来」、「友好」、「人生の喜び」といった戦争とは真逆の言葉を冠した彫像たちがあたかも祈念像を主尊とし、それを取り巻く眷属のように配される。この状況を小田原氏は「展覧会場のような」と形容したが、私はどこか屋根のないお寺のお堂に入ったかのような感じを受けた。

【平和彫刻群の作品タイトル】

図4 未来の世代を守る像

図5 長崎の鐘

図6 平和(左奥)

人生の喜び(中央奥)

諸国民友好の像(右奥)

図7 生命と平和との花

図8 人生への賛歌

《長崎刑務所浦上支所跡》(図9)

次にこの《平和祈念像》と平和の彫刻群の間にある《長崎刑務所浦上支所跡》を見てみよう。

この平和公園のある場所はかつて長崎刑務所浦上支所があり、原子爆弾投下時、その建物と塀は一瞬にして崩壊し、職員18人、官舎住居者35人、受刑者および被告人81人(中国人32人、朝鮮人13人含む)計134人が犠牲となった(同書38頁)。そして、1992年、平和公園の地下駐車場建設工事に際して、刑務所の基礎部分や死刑場の遺構が発見され、保存を求める運動が起きる(同書37-38頁)。

このことはこの論考を読むまで知らなかったというか、忘れていたのか(中学の修学旅行で訪れているので、聞いていたかもしれないが)。それを実際にここで体験した時、やはり《平和祈念像》や平和の彫刻群をみるような感じではなく、ここで何が起きたか、それを「平和の園」で感じる。小田原氏の本論考の4章で言及される原爆碑の調査を通じて出会った平和活動家が東日本大震災の津波で転覆した船について小田原に発した言葉、「presentationがあればそれでいいのではないか、representationは必要ないのではないか」を思い出させたのである。我々はその事実を見れば、そのことをもっと知りたくなり、痛みや悲しみを追体験できる。

自分もこんな体験をしたことがある。2001年9月11日のアメリカの同時多発テロの当時、私はインドにいてある世界遺産の近くの簡易宿舎の一室で、アメリカのある大学の教授とその映像をテレビで見た。

その後、インドもそのテロの影響を受け、アラビア海沿岸やその後立ち寄ったインド西の内陸の町でも上空に戦闘機が飛び交う光景を目の当たりとし、インド在住の留学時にお世話になった先輩の勧めで帰国の途についた。何年か後にニューヨークに行くことがあり、グランドゼロの中に入った途端、身体が震え、涙が止まらない状態にあり、そして、顔をあげると、そこには瓦礫の中から取り出された鉄筋の材で十字架のようなものが確か掲げてあったのを記憶している。それは自分にとっては凄い体験で、今でもその時の状況は忘れられない。多分、インドの体験がなければそれはなかっただろうと思うが、長崎刑務所浦上支所跡を目撃した感覚はそれに近いのではないだろうかと思えばそのように考えている。以上、これが平和公園である。

富永直樹作《母子像》(図10)

《原爆落下中心地碑》(図11)

次に原爆落下中心地公園を歩く。(実際はこちらの方を先に歩いたが)ここはまさに原子爆弾が落とされた場所である。それを示すものとして、原爆投下後、最初にこの地に立てられた原爆落下中心地を示す標柱がある(参考1《原爆落下中心地の標柱》1945年10月撮影)。その写真を見ると、一面焼け野原で、建てられた標柱には「爆心centre」と記されている。

その後、この爆心地には「原子爆弾中心地」と書かれた木製の矢羽型標柱が建てられた。(小田原のどかはこの標柱をモチーフにして《↓》というインスタレーション作品を制作している。参考2)。その後、

このモニュメントは1956（昭和31）年3月に蛇紋岩によるものに作り替えられ、それが「原爆落下中心地碑」と呼ばれるようになった。高さ6メートル、左右の各長さが1メートル、幅50センチの二等辺三角形の等辺を持つ三角柱で、二等辺三角形の頂角は30度で、底角は各75度、右が浦上天主堂、もう一方の左が陸軍兵舎に焼きついた原爆の焼影の角に由来するらしい（同書25頁）。

また、1958（昭和33）年には、被爆で破壊された浦上天主堂が撤去され、1959（昭和34）年にかろうじて残った一部が再建された（参考3《浦上天主堂被爆遺産》、参考4《浦上天主堂・鐘楼ドーム》）

そして、《平和祈念像》から40年後、被爆五十周年記念事業碑として計画されたのが富永直樹作《母子像》であり、長崎市は前述の原爆落下中心地碑を撤去し、その場所にその像を被爆五十周年記念事業碑として据えると発表した。この長崎市の発表に対して、強い反発が起こり、さらに日本全国からも中心地碑撤去反対の運動が起こり、その抵抗の結果、中心地碑の撤去は撤回され、1997年《母子像》は現在の居場所に、公園の片隅に設置され、現在に至る（図10）。

また、撤去を免れた中心地碑は1996年に風化によりひどくなったことから御影石に作り替えられたのが現在のものになる（図11）。1997年までは中心地碑はその役目である原爆落下と炸裂地点を指し示すことができていた。しかし、この状況が1997年に中心地碑の近くに設置されてい

た殉難者奉安箱が黒の御影石の三角柱の正面に据え付けられてしまった。そのため、中心地碑はその本来の意味をなくしてしまっている。実際、現物を見ると、ただの御影石の直方体の塊に「原爆殉難者名奉安」と書かれ、中心地碑の前に置かれ、不自由になった中心地碑、意味を剥奪されてしまったのも同然である。そのためどこかモニュメントとしての強さが感じられない感じを現場で受けたことを記憶している。

その反対に、公園の片隅に設置された《母子像》の方が逆に異様な大きさを誇示し、これはたればの話になるが、中心地碑とその場所を据え換えられていたら、そんな感じは受けなかったのだろうか。《平和祈念像》とセットになることで、その大きさは適切な大きさになっていたのかもしれない。テキストではその大きさまではイメージできなかったが、実際行ってみたときの感想は「実に大きい」その一言に尽きる。

さいごに

以上、小田原のどか氏による「この国の彫刻のために」に登場する爆心地・長崎の平和公園を中心とするモニュメントを实际見て、歩いてみた。もちろん、本論考の内容には踏み込んでないが、平和活動家が発表した「presentaionとrepresentation」の問題については自分の体験を含め、踏み込めたかもしれない。

また、本論考の付記2にはこの「presentaionとrepresentation」という問題を無効化するような事例として、2011年の東日本大震災の津波から生き残った陸前

高田市の「奇跡の一本松」が取り上げられている。枯れてしまったあと、防腐処理を施して、中身をくり抜き金属心棒を通し、プラスチックで枝葉の一つ一つまでを再現している（「サイボーグ松」と呼ばれているらしい）、これをもとにあった場所にカタストロフィのモニュメントとしてすることが言及されてあった。

このように考えてみると、今後どんなモニュメントや彫刻？ができていくのだろうか。我々がこれまで見てきた「彫刻」にはない世界が、もっと更新されていくのだろうか。昨年小田原のどかによる叢書『彫刻1』が彼女の運営するトポフィルから出版された。それも非常に興味深く、『彫刻の問題』のその後も触れられており、次の刊行も楽しみである。

今回の一連の歩きの中で、長崎病院近くの山王神社の被爆した二の鳥居も訪れた（参考5《被爆した山王神社二の鳥居》）。さらにこの境内の入り口には被爆した二本の大楠がある（参考6）。この大楠は被爆の影響で一時は枯れ木同然だったが、次第に樹勢を盛り返し現在に至っている。まさにこれこそが《奇跡の…》と冠したい楠ではないだろうか？

[参考文献一覧]

- 白川昌生・金井直・小田原のどか著『彫刻の問題』、2017年、トポフィル
- 小田原のどか編著『彫刻1: 空白の時代、戦時の彫刻／この国の彫刻のはじまりへ』2018年、トポフィル
- 「矢印が示す爆心地」『長崎新聞』2014年11月2日付

「爆心地の彫刻問う」『長崎新聞』2016年
(<https://twitter.com/odawaranodoka/status/791134555734437892>)

[図版出典]

図1～11-1、参考3～6は筆者の撮影による。

参考1 原爆落下中心地の標柱 原爆落下中心公園の解説パネルより転載。

矢羽型モニュメント 白川昌生・金井直・小田原のどか（2017）p.105より転載。

参考2 小田原のどか《↓》インスタレーション 「彫刻の問題」展（2016） 白川昌生・金井直・小田原のどか（2017）p.102.

[付記]

本小稿を書き終えてから、2019年1月末に東京に用事があり、その序でに3331 Arts Chiyoda B104（東京都・神田）で開催の黒田大祐「不在の彫刻史2」を見る機会があった。そこで彫刻家・^{なてはたたいち}建畠大夢（1880-1942）の教え子たちの制作した銅像に黒田氏が「彫刻って何ですか？」と問うていた映像作品があった。小田原のどか氏と同じように「彫刻とは何か」を探し求める同朋に出会うことができた。今後も二人の彫刻を問いつける歩みに注視していきたい。

永田 郁：小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く



図1 GUIDE MAP (平和公園周辺地図)



図2 北村西望作《平和祈念像》
平和公園



図2-1 平和祈念像作者の言葉
像台座部分



図3 平和の泉



図4 未来の世代を守る像



図5 長崎の鐘



図6 平和（左奥） 人生の喜び（中央奥） 諸国民友好の像（右奥）



図7 生命と平和の花



図8 人生への賛歌

永田 郁：小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く



図9 長崎刑務所浦上支所跡 平和公園



図10 富永直樹作《母子像》
原爆落下中心公園



図11 原爆落下中心地碑
原爆落下中心公園



図11-1 原爆殉難者奉安箱



参考1 原爆落下中心地の標柱
(1945年10月撮影)



矢羽型モニュメント 長崎民友新聞
1947 (昭和22) 年8月9日付



参考3 浦上天主堂の一部
原爆落下中心公園



参考2 小田原のどか《↓》
インスタレーション 「彫刻の問題」展 (2016)



参考4 浦上天主堂 鐘楼&彫像

永田 郁：小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く



参考5-1～3 山王神社二の鳥居



参考6 被爆した大楠、山王神社

